

巻頭言

## 「Workers 被災地に起つ」 上映一周年に想う

森 康行 (映画監督)

2011年3月11日に起こった東日本大震災による被害と被災地の方々に対して、何かできることはないだろうか、どうしたら被災地の方々に寄り添うことが出来るのだろうかと日本中の誰もが考えたことだろうと思います。

被災した人たちは… 数多くの命を落とされた方々、生き延びることで精いっぱいだった人たち、働く場所も家も生活の糧も何もかも失った人たちです。驚天動地の時が過ぎ、目の前に広がる無残な光景を見て、その人たちはこれからどのように生きていったらよいのかときっと思ったことでしょう。

復興という言葉がよく使われました。東北の被災地には数多くのボランティアの方々が入りました。瓦礫の片づけ、コミュニティを新しくつくるために奮闘しました。しかし、復興には長い時間がかかります。いつまでもその地にとどまって支援を行っていくことは困難なことです。

支援はもちろん大切なことです。しかし、そこをふるさとし、住み続けていこうとしている人たちが自らの手で自らの地を創っていく、これがもっとも大切なことであるのは言うまでも

ありません。東北の被災地で事業を立ち上げ、“被災者自らの力で仕事と地域を起こす”ことをサポートするのがワーカーズコープの理念であり、実践です。

このことは私にあることを思い出させました。それは以前一緒に仕事をしたことがあるアンコールワットの研究者、石澤良昭上智大学元学長のことです。

石澤良昭先生は、1961年からフランス隊に参加し、アンコールワットの研究を続けてきました。今日では世界の遺跡として連日世界各国からの観光客が絶えないアンコールワット遺跡群ですが、当時は誰一人として訪れる人もなく密林の中に埋もれ、ほったらかしにされ遺跡全体が大きく痛んでいました。

ベトナム戦争、そして1975年から続いたカンボジアのポルポト政権下での破壊によって、遺跡の劣化は進んでいました。さらに、ポルポト時代には数多くの人々が殺されました。石澤先生と一緒にアンコールワットの修復や発掘を行っていたカンボジア人の同僚も多くが殺され、たった一人しかご存命ではありませんでした。

内戦が終わって平和になり、フラン

スやドイツ、イギリスが主導して遺跡の修復を始めようとしてきました。その時に石澤先生は、それまで外国人の研究者が主導してきた遺跡の発掘・保存・修復作業ではなく、「カンボジア人自身が遺跡を守るべきである。いくら素晴らしい遺跡であっても、外国の人たちの手で行われたものではカンボジアの人たちの民族としての誇りも喜びも取り戻せない」と考えました。アンコールワットの発掘・保存・修復作業を「カンボジア人の手で」行うために、次の時代を担う若者たちを上智大学に留学させ研究者として養成していきました。そして現地に「アジア人材養成研究センター」を設立、さらに世界各国の研究者がサポートして遺跡を守っていく「アプサラ機構」が発足し、世界の至宝をカンボジア人の手で守っています。

私には、石澤先生の考えがワーカーズの考えと真底でつながっているように思えます。翻って「Workers 被災地に起つ」を考えてみましょう。この映画は、東日本大震災を切り口に、今私たちが抱えている現代のさまざまな課題を一緒に考えることを提起しています。

それは、職になかなか馴染めず安定

した生活を得られない若者たち。老後の保障が得られず、老後に希望を持っていない人たち。子育てに悩む若いお母さんたち。さらに、その悩みを共有するところを見つけることも出来ず、悶々としている人たち。映画にも出てくるように、押し寄せる過疎の波に翻弄され、あきらめている地域の人たち。東日本大震災の後、毎年大きな災害に見舞われ、未だに災害から立ち直れないでいる各地の人たち。さらに、日本を覆うさまざまな差別や偏見によって苦しめられている人たち、等々。

そのような課題に私たちはどのように向き合っていくのか。忘れようとしても忘れられない東日本大震災。そして、その後毎年襲ってくる災厄。

ワーカーズコープは被災者が自らの力でふるさとを取り戻し、そこで暮らして行くためのサポートをしてきました。震災からまだ8年、被災地の人たちとともに、その運動と事業は始まったばかりです。上映から一年、“これからどう生きるのか”。ワーカーズの取り組みとともにこの映画の真価が発揮されるのはこれからです。